

## F-5 ノルウェー語の付加詞形容詞における一致のゆれ: 意味に注目したコーパス研究\*

谷川みずき

東京大学大学院 修士課程

【要旨】 ノルウェー語を含む大陸スカンジナビア諸語には、表現される意味によって主語と述語形容詞の一致にずれが観察される興味深い現象 (パンケーキ構文) がある。本発表は、付加詞形容詞にも機能によって主語と一致したりしなかったりするという現象が観察される点に注目する。ノルウェー語では、形容詞は、二次述語として機能する場合、主語と性・数において一致し、主語の特徴を描写する (= 二次述語構文)。一方、副詞として機能する場合、主語と一致せず中性単数形をとり、動詞の様態を描写する (= 副詞構文)。本発表は、Shultze-Berndt & Himmelmann (2004) の二次述語・副詞に関する通言語的な研究を出発点に、ノルウェー語の二次述語構文と副詞構文の間の構文選択に形容詞の意味クラスが影響することを主張する。コーパスによる計量的な調査を行うことで、場面レベル (stage-level) の形容詞は、二次述語構文をとる傾向にあり、一方個体レベル (individual-level) の形容詞は、副詞構文をとる傾向にあるということを示す。

### 1. はじめに

- ノルウェー語の形容詞は一般的にコントローラー (ここでは主語) の性・数と一致をする (第2節)<sup>1</sup>

- (1) *Mannen er tankefull.* (2) *Mannen er hvileløs.*  
man.M.SG be.PRS pensive.M.SG man.M.SG be.PRS restless.M.SG  
'The man is pensive.' 'The man is restless.'

- しかし、興味深いことに、ノルウェー語 (を含む大陸スカンジナビア諸語) では、形容詞述語コピー文において主語と述語形容詞が性・数において不一致を示す現象 (パンケーキ構文) が観察される (Enger 2004; Corbett 2006; Enger 2013; Josefsson 2014; Haugen & Enger 2014; Haugen & Enger 2019 など)
  - 例えば、(3) では、主語名詞 (女性/複数) と述語形容詞 (中性/単数) が性と数において不一致を示しており、(4) のような通常的一致を示さない

- (3) *Pannekaker er godt.* (4) *Pannekaker er gode.*  
pancake.F.PL be.PRS good.N.SG pancake.F.PL be.PRS good.F.PL  
'Pancakes are delicious.' (Haugen & Enger 2019: 532) 'Pancakes are delicious.' (Haugen & Enger 2019: 533)

- 本発表は、主語と一致したりしなかったりする現象が上記のような述語形容詞だけではなく、これまで注目されてこなかった付加詞形容詞にも観察されるということに着目する
- 前提①: ノルウェー語の付加詞形容詞には、主語と性・数において一致するもの (4)、一致せず単数・中性形で表されるもの (5)、一致してもしなくても文法的に許容されるもの (6) (7) がある

\*本予稿集の作成にあたって、伊藤たかね、島健太、鈴木唯、田口智大、長屋尚典、菱山湧人、山本恭裕、吉田樹生、諸隈夕子各氏から貴重なコメントをいただいた。なお、本発表の誤りは言うまでもなく全て筆者の責任である。

<sup>1</sup> 本論文で用いられる略称記号は以下の通りである: CMN-共性、DEF-定、F-女性、M-男性、N-中性、PL 複数、PRS-現在、PST-過去、SG-単数

- (4) *Jeg gikk sulten hjem.* (5) *Jeg gikk kjapt hjem.*  
 I walk.PST hungry.CMN.SG home I walk.PST quick.N.SG home  
 ‘I walked home **hungry.**’ ‘I walked home **quickly.**’
- (6) *Jeg gikk {tankefull/tankefullt} hjem.* (7) *Jeg gikk {hvileløs/hvileløst} hjem.*  
 I walk.PST {pensive.CMN.SG /N.SG} home I walk.PST {without\_break.CMN.SG /N.SG} home  
 ‘I walked home **pensive.**’ ‘I walked home **without break.**’

- 前提②: ノルウェー語の付加詞形容詞における一致の有無は、形容詞が二次述語構文の述語として機能するか副詞構文の副詞として機能するかの区別に対応している
  - 形容詞が主語と一致する場合 (「**二次述語構文**」): 形容詞は主語の状態を表す二次述語として機能する ((4) *sulten*, (6) *tankefull*, (7) *hvileløs* は主語 *jeg* ‘I’ の状態を表している)
  - 形容詞が主語と一致しない (中性単数形で現れる) 場合 (「**副詞構文**」): 形容詞は動詞の様態を表す副詞として機能する ((5) *kjapt*, (6) *tankefullt*, (7) *hvileløst* は動詞 *gikk* ‘walk.PST’ を修飾している) (Faarlund, Lie & Vannebo 1997: 391)
- 前提③: 通言語的に二次述語構文と副詞構文は連続体をなす: Shultze-Berndt & Himmelmann (2004) は、両者間の構文選択の通言語的傾向を意味クラスのスケールにより説明している (図 1)

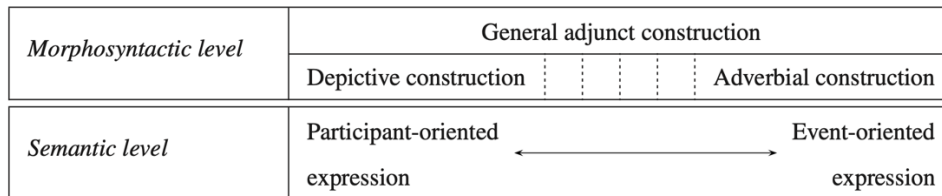


図 1. 二次述語構文と副詞構文の連続体 (Shultze-Berndt & Himmelmann 2004: 79)

- 前提④: 二次述語構文をとることができるのは、場面レベル (stage-level) の形容詞に限られており、個体レベル (individual-level) は不可であるという議論がされてきた (Stump 1985; McNally 1994; Shultze-Berndt 2017: 1240–1241)
  - 以上の前提①②③④から、ノルウェー語の付加詞形容詞の一致の有無は、二次述語構文と副詞構文の連続体における構文選択の問題であり、この構文選択は形容詞の意味クラスの影響を受けると予測できる
  - 本発表では、Shultze-Berndt & Himmelmann (2004) の類型論的研究を出発点に仮説 (8) を立てる
- (8) 仮説: 形容詞の意味クラスが場面レベルと個体レベルのどちらであるかが、二次述語構文と副詞構文間の構文選択に影響を与える
- 以下の方法を用いて、(8) の仮説について実証的に検討する
    - ノルウェー語の形容詞を場面レベル形容詞と個体レベル形容詞にテストを用いて分類する
    - それぞれのレベルに属する異なる形容詞が付加詞として現れる場合に、どの程度主語と性・数において一致を示すかをコーパスで調査し、結果を分析する
  - コーパス調査の分析結果: 場面レベルの形容詞は主語と性・数について一致を示し、個体レベルの形容詞は一致を示さない傾向があるということが明らかになる → (8) を支持する
  - 本発表の構成は、以下の通りである:

- 第2節: ノルウェー語の形容詞の一致システムの概要について説明する
- 第3節: 方法論として今回行ったコーパス調査について説明する
- 第4節: コーパス調査の結果を報告し分析する
- 第5節: 結果を議論する
- 第6節: 全体のまとめを行う

## 2. ノルウェー語の形容詞と一致

- ノルウェー語の形容詞は、形容詞の一致を決定づける要素（「コントローラー」(Corbett 2006: 4)）の性（男性・女性/中性）および数（単数/複数）によって異なる一致のパターンを示す
  - 単数形には、女性と男性の区別はなく（そのため以下、北ゲルマン語の伝統に沿って「共性」(common gender) としてまとめる）、共性と中性の区別のみがある
  - 複数形には、性による区別がない
  - 言い換えると、形容詞には、共性/単数 (9)、中性/単数 (10)、複数 (11) の3つの区別がある

(9) {*Jenta* / *Gutten*} *er* *vakker*.  
 {girl.F.SG.DEF boy.M.SG.DEF} be.PRS **beautiful.CMN.SG**  
 ‘{The girl / The boy} is **beautiful**.’ (共性/単数)

(10) *Landet* *er* *vakkert*.  
 country.N.SG.DEF be.PRS **beautiful.N.SG**  
 ‘The country is **beautiful**.’ (中性/単数)

(11) {*Jentene* / *Guttene* / *Landene*} *er* *vakre*.  
 {girl.F.PL.DEF boy.M.PL.DEF country.N.PL.DEF} be.PRS **beautiful.CMN.PL**  
 ‘{The girls / The boys / The countries} are **beautiful**.’ (複数)

- 形容詞によっては、屈折しないものや、数の区別しか観察できないものがある
  - 性・数によって形が変わらない不変化形容詞 (*bra* ‘good’, *stille* ‘quiet’, *lei* ‘sad’ 等)
  - 例 (12): 共性/単数 (*Gutten* ‘the boy’), 中性/単数 (*Landet* ‘the country’), 複数 (*Landene* ‘the countries’) において形が変わらない

(12) {*Gutten* / *Landet* / *Landene*} *er* *stille*.  
 {boy.M.SG.DEF country.N.SG.DEF country.N.PL.DEF} be.PRS **quiet**  
 ‘{The boy / The boys / The countries} {is/are} **quiet**.’

- 単数形と複数形の区別しか観察できない形容詞 (*heldig* ‘lucky’, *glad* ‘glad’ 等) (13)

(13) {*Gutten* / *Landet* / *Landene*} *er* {*heldig* / *heldige*}.  
 {boy.M.SG.DEF country.N.SG.DEF country.N.PL.DEF} be.PRS {**lucky.SG** / **lucky.PL**}  
 ‘{The boy / The country / The countries} {is/are} **lucky**.’

### 3. 方法論: コーパス調査について

- コーパス調査では、異なる意味クラス (場面レベルと個体レベル) に属する形容詞と動詞の組み合わせにおける主語と形容詞の一致/不一致の頻度を調査する
- 使用コーパス: Sketch Engine “noTenTen17 Bokmål” コーパス (24 億語を含むウェブコーパス) を用いる ([https://app.sketchengine.eu/#concordance?corpname=preloaded%2Fnotenten17\\_bokmal/](https://app.sketchengine.eu/#concordance?corpname=preloaded%2Fnotenten17_bokmal/))
- 具体的な調査手順:
  - 手順 1: 下記の調査動詞と調査形容詞の全ての組み合わせについて、それぞれ動詞と形容詞を lemma として設定し、動詞の直後のスロットに形容詞を指定して検索をかける
  - 手順 2: コーパス上の「サンプルをランダムに算出」機能で最大 100 例まで収集しエクスポート
  - 手順 3: 検索結果から、形容詞が比較級と最大級である場合を取り除く (屈折しないため)
  - 手順 4: 検索結果から、主語が中性単数のものを取り除く (形容詞が主語と一致していない場合にとる形が中性単数形であるため一致の有無の区別がつかない)
  - 手順 5: コピュラ構文 (形容詞が主述語として機能している) の例や慣用表現を取り除く
  - 手順 6: 主語が省略されていて特定できない場合も除く
- 調査動詞: 移動動詞に限定 (*gå* ‘walk’, *komme* ‘come’, *dra* ‘go’, *traske* ‘walk’, *spasere* ‘walk’, *rusle* ‘walk’, *vandre* ‘wander’, *løpe* ‘run’, *springe* ‘run’, *sprinte* ‘run’, *hoppe* ‘jump’, *spurte* ‘run’, *jogge* ‘jog’)
  - 理由: ノルウェー語では、無生物は中性形で表されやすく、無生物の中性名詞が主語の場合、主語と形容詞が一致を示しているかどうか判断が不可能になるという問題が生じる; 移動動詞は有生物を主語にとりやすいと考えられるため、この問題を回避しやすいと期待する
- 調査形容詞: 場面レベルと個体レベル (Carlson 1980; Krifka et al. 1995; 影山 2009) の形容詞を選ぶ
  - 理由: 先行研究において場面レベルのみが二次述語構文をとるという議論がされてきたため (Stump 1985; McNally 1994; Schultze-Berndt 2017: 1240–1241)
  - 場面レベル: 一時的な状態を表すもの (例: *sliten* ‘tired’, *sluten* ‘hungry’, *naken* ‘naked’, *skitten* ‘dirty’, *flau* ‘embarrassed’, etc.)
  - 個体レベル: 永久的な特性を表すもの (例: *rask* ‘fast’, *pen* ‘nice’, *vakker* ‘beautiful’, etc.)
- 調査形容詞の選び方:
  - 主語と形容詞が性と数において一致しているかを調べたいため、屈折しない形容詞と数の区別しか観察できない形容詞 (第 2 節) は分析対象から除く
  - 場面レベルの形容詞は、Shultze-Berndt & Himmelmann (2004) の通言語的研究で二次述語構文として表されやすいものを参考にして 10 個選ぶ
  - 個体レベルの形容詞は、同コーパスで *løpe* ‘run’ の直後のスロットに出現する形容詞の頻度ランキングから、屈折が観察でき、本稿が対象とする付加詞としての機能を持つ形容詞を 7 個選ぶ
  - さらに、比較するために、以下の *X er en ADJ person* テストでは個体レベルに分類されるが、場面レベルとしても捉えることが可能であると判断した形容詞を 3 個選ぶ<sup>2</sup>
- 場面レベルと個体レベルの形容詞を分ける *X er en ADJ person* テスト:
  - 場面レベルの形容詞: 一時的な状態を表すため、人の属性を表現する *X er en ADJ person*. 「X は ADJ な人間だ」という文の中で用いられると大変不自然である (14)
  - 個体レベルの形容詞: 属性を表すため、同文で用いられても自然である (15)

<sup>2</sup> Faarlund, Lie & Vannebo (1997: 391) の *taus* ‘silent’ という形容詞が付加詞として機能する場合、二次述語なのか副詞なのか意味的に区別しづらいという言及から着想を得た

(14) ??*Han er en sliten person.*  
 he be.PRS a tired person  
 ‘He is a tired person.’

(15) *Han er en rask person.*  
 he be.PRS a fast person  
 ‘He is a fast person.’

#### 4. 結果

- コーパス調査の結果をまとめると表1(本稿末)と図2のようになる
- 表1は、「形容詞」、「意味クラス(場面レベルあるいは個体レベル)」、「一致あり」の数、「一致なし」の数および「一致率」を集計したものである
  - 「一致あり」および「一致なし」は、各移動動詞と各形容詞の頻度の総計である
- 図2は、X軸が一致した形容詞の頻度で、Y軸が一致しなかった形容詞の頻度である
  - 青色が場面レベル形容詞、赤色が個体レベル形容詞を示している
- 表1と図2から以下のことがわかる:

(16) 形容詞の一致は無秩序ではなく、むしろ明らかな傾向をみせる: 多くの形容詞は、ほぼ一貫して一致あるいは不一致をみせる

(17) 場面レベル形容詞は、一致を示し、個体レベル形容詞は、一致を示さない傾向にある

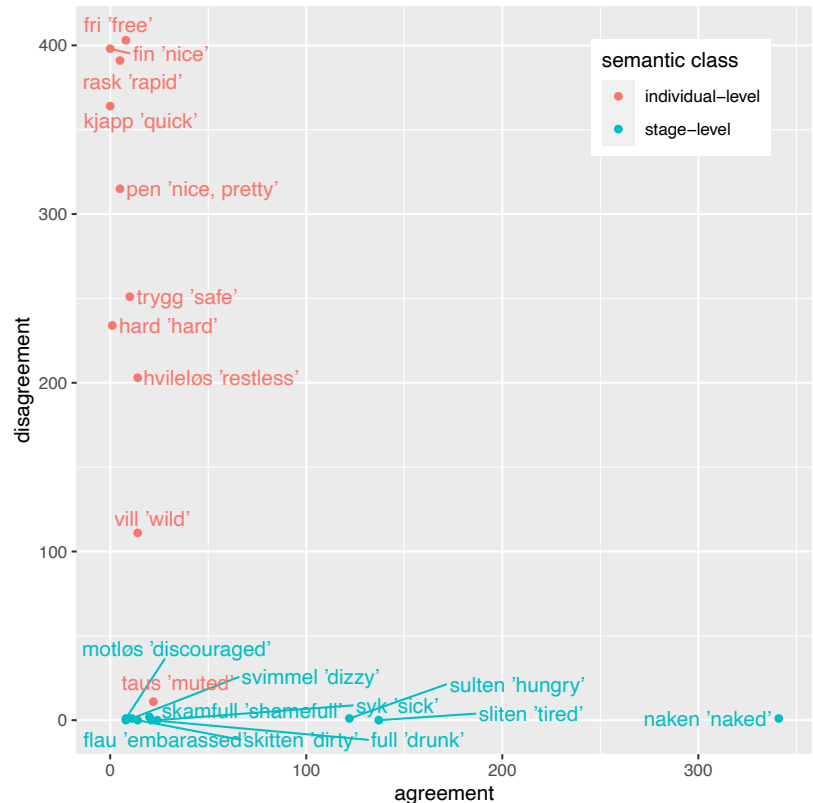


図2. 形容詞の(不)一致の数と形容詞の意味クラス

(18) 場面レベル形容詞には一致のゆれがほぼ観察されない一方で、個体レベル形容詞には観察される
 

- 例: *trygg* 'safe': (19)では主語(共性/単数)と一致しているが、(20)ではしていない
- インフォーマントに調査したところ、(19)のように一致している主語と性・数において一致している場合は主語の心情を表すが、一方(20)のように一致しない場合は状況説明になるという

(19) ...*du* *spaserer* ***trygg*** *omkring*...  
 you walk.PRS **safe**.CMN.SG around  
 ‘...you walk **safe** around...’ (ekris.net)

(20) ...*du* *kan* *spasere* ***tryggt*** *i* *gater*...  
 you can walk **safe**.N.SG in street.PL  
 ‘...you can walk **safely** in streets...’ (svennie.no)

## 5. 議論

- ポイント 1: 場面レベルと個体レベルの区別が付加詞形容詞の構文選択に影響を与える (仮説 (8))
  - 場面レベル形容詞: 主語と性・数において一致を示し、二次述語構文をとる; 事象発生時の主語の一時的な性質や状態を表す
  - 個体レベル形容詞: 主語と性・数において一致を示さず、副詞構文をとる; 動詞の様態を表す
  - Shultze-Berndt & Himmelmann (2004) の主張する通言語的な傾向に一致する
  - ただし、場面レベルと個体レベルの区別が一致の有無をカテゴリカルに決定するわけではない: 一致を示す形容詞は常に一致を示し、一致を示さない形容詞は常に一致を示さないというように語彙的に単純に決まっているわけではない
- ポイント 2: 個体レベル形容詞と場面レベル形容詞では構文選択のゆれの傾向が異なる
  - 場面レベル形容詞: 構文選択のゆれがほぼ観察されない; 動詞の様態を表すことができず、副詞として機能することができない: *X V på en ADJ måte* 「X は ADJ な方法で V をする」といえるかテストを行うと不自然 (21) (個体レベルの(22) は自然)

(21) ?*Jeg gikk på en sulten måte.*  
I walk.PST on a hungry.CMN.SG way.CMN.SG  
'I walked in a hungry way.'  
(場面レベル形容詞)

(22) *Jeg gikk på en vakker måte.*  
I walk.PST on a beautiful.CMN.SG way.CMN.SG  
'I walked in a beautiful way.'  
(個体レベル形容詞)

- 個体レベル形容詞: 構文選択のゆれが多少観察される; 付加詞として機能する場合、基本的に移動の様態を表すが、個体レベル形容詞はそもそも主語の属性を表すため、付加詞として機能した場合も主語の特性を表すことが完全に不可能ではない (23)

(23)... *gjestene kom pene i tøyet.*  
guest.CMN.PL.DEF come.PST pretty.PL in cloth.DEF  
lit. '...the guests came pretty in clothes.'

- 個体レベル形容詞の一致のゆれは今回コーパス調査をしてみて初めて明らかになった
- インフォーマントに容認テストを行うと、特に *rask* 'fast' などの副詞的な機能でよく用いられる形容詞は、中性単数形以外で主語に一致すると非文法的であるという回答が得られる

## 6. おわりに

- 本発表は、ノルウェー語の付加詞形容詞の一致現象について主に以下の3点を明らかにした
  - 第一に、付加詞形容詞の主語との一致には明らかな傾向がある: 多くの形容詞は、ほぼ一貫して一致あるいは不一致をみせる
  - 第二に、独立に存在する形容詞の意味クラスが一致の有無と相関する: 場面レベル形容詞は主語と一致を示すが、個体レベル形容詞は示さない
  - 第三に、個体レベル形容詞と場面レベル形容詞では構文選択のゆれの傾向が異なる
- 本発表は、付加詞形容詞の一致の実態をコーパス調査によって初めて計量的に明らかにした

参考文献:

- Carlson, Gregory. 1980. *Reference to Kinds in English*. New York: Garland.
- Corbett, Greville G. 2006. *Agreement* (Cambridge Textbooks in Linguistics). Cambridge: Cambridge University Press.
- Enger, Hans-Olav. 2004. Scandinavian pancake sentences as semantic agreement. *Nordic Journal of Linguistics* 27(1). 5–34.
- Enger, Hans-Olav. 2013. Scandinavian pancake sentences revisited. *Nordic Journal of Linguistics* 36(3). 275–301.
- Faarlund, Jan Terje, Svein Lie & Kjell Ivar Vannebo. 1997. *Norsk Referansegrammatikk [Norwegian Reference Grammar]*. Oslo: Universitetsforlaget.
- Haugen, Tor Arne & Hans-Olav Enger. 2014. Scandinavian pancake constructions as a family of constructions. *Cognitive Linguistic Studies* 1(2). 171–196.
- Haugen, Tor Arne & Hans-Olav Enger. 2019. The semantics of Scandinavian pancake constructions. *Linguistics* 57(3). 531–575.
- 影山太郎. 2009. 言語の制約と叙述機能. 言語研究 136. 1–34.
- Josefsson, Gunlög. 2014. Pancake sentences and the semanticization of formal gender in Mainland Scandinavian. *Language Sciences* 43. 62–76.
- Krifka, Manfred, Francis Pelletier, Greg Carlson, Alice ter Meulen, Godehard Link & Gennaro Chierchia. 1995. Genericity: An introduction. In Gregory Carlson & Francis Pelletier (eds.), *The Generic Book*, 1–124. University of Chicago Press.
- McNally, Louise. 1994. Adjunct predicates and the individual/stage distinction. *Proceedings of WCCFL 12* 561–576.
- Schultze-Berndt, Eva. 2017. Depictive secondary predicates in typological perspective. In Martin Everaert & Henk C. van Riemsdijk (eds.), *The Wiley Blackwell Companion to Syntax, Second Edition*, 1233–1262. Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- Shultze-Berndt, Eva & Nikolaus P Himmelmann. 2004. Depictive secondary predicates in crosslinguistic perspective. *Linguistic Typology* 8. 59–131.
- Stump, Gregory. 1985. *The Semantic Variability of Absolute Constructions*. Dordrecht: Reidel.

表 1. 形容詞の(不)一致の数と形容詞の意味クラス

形容詞	意味クラス	一致あり	一致なし	一致率
<i>naken</i> ‘naked’	場面	341	1	100%
<i>syk</i> ‘sick’	場面	24	0	100%
<i>sliten</i> ‘tired’	場面	137	0	100%
<i>full</i> ‘drunk’	場面	21	0	100%
<i>skitten</i> ‘dirty’	場面	14	0	100%
<i>flau</i> ‘embarrassed’	場面	8	0	100%
<i>sulten</i> ‘hungry’	場面	122	1	99%
<i>svimmel</i> ‘dizzy’	場面	11	1	92%
<i>skamfull</i> ‘shamefull’	場面	20	2	91%
<i>motløs</i> ‘discouraged’	場面	8	1	89%
<i>taus</i> ‘silent’	個体	22	32	67%
<i>hvileløs</i> ‘restless’	個体	14	217	6%
<i>trygg</i> ‘safe’	個体	10	261	4%
<i>pen</i> ‘nice, pretty’	個体	5	294	2%
<i>fri</i> ‘free’	個体	8	410	2%
<i>vill</i> ‘wild’	個体	14	125	1.1%
<i>rask</i> ‘rapid’	個体	4	398	1%
<i>fin</i> ‘nice’	個体	0	398	0%
<i>hard</i> ‘hard’	個体	1	234	0%
<i>kjapp</i> ‘quick’	個体	0	224	0%